

反性役割ステレオタイプ行動に対する子どもの評価

相良順子

(お茶の水女子大人間文化研究科)

【目的】

今までの研究は、子どもが、年齢とともに、多くの社会的規範が恣意的なものであることを理解するようになること (Levy, Taylor, Gelman, 1995)、そして性役割ステレオタイプに反する行動 (たとえば、女性のように髪をのばしている男性) に対する認知も柔軟になっていくことを示した。

しかし、その行動を好むかどうかという感情的評価についての研究は少ない。Levy, et al.

(1995) は、感情的評価は認知的な柔軟性と異なり、年齢に関係なく安定していることを示したが、彼等の研究の対象は、4歳、8歳、成人であり、認知的な柔軟性が最も低くなるといわれる就学前の子どもを対象としていない。

そこで本研究では、幼児期から児童期にかけての子どもが性役割ステレオタイプに反する行動をどう評価するか、そしてその評価は年齢によって変化するかどうか検討した。

【方法】

まず、Hort(1988)の使用した方法を参考に、反ステレオタイプ行動を、外見、活動、職業の3つのカテゴリーに分け、5名の小学4年生と10名前後の幼稚園児を対象に予備実験を行った。

その結果をもとに、本実験では下記の6項目を反ステレオタイプ行動として使用した。

1. いつも男の子の服を着ている女の子 (外見)
2. プロレスが大好きな女の子またはサッカーが好きな女の子 (活動)、
3. 将来、電車の運転手になりたいと思っている女の子 (職業)
4. 口紅をつけている男の子 (外見)
5. 着せ替え人形遊びが大好きな男の子 (活動)
6. 将来、看護婦さんになりたいと思っている男の子 (職業)

◇被験者 幼稚園年長児24名 (女子13名、男子11名)、小学2年生 (女子18名、男子15名)、小学4年生 (女子18名、男子14名)。被験者は全員両親がそろっている。

◇手続き 反ステレオタイプ行動に関する子どもの評価を個別に聞く。各項目のターゲットの子どもにはイメージしやすいように名前をつける。

外見の項目 (1と4) については子どもがイメージしやすいようにイラスト風の絵を提示する。

実験者 (女性) は被験者の隣に座り、質問をする。例えば、上記5.の着せ替え人形が好きな男の子について「〇くんという男の子がいます。〇くんは着せ替え人形遊びが大好きです。あなたは〇君をどのくらい好きですか」と聞き、悲しそうな顔から喜んでる顔まで4つ並んだ絵を使い子どもの評価を調べる。

【結果と考察】

図1に反ステレオタイプ行動に対する評価点を示した。被験者の性×学年×行動の次元 (被験者内要因) の3要因の分散分析を行った結果、行動の種類の主効果 ($F(5, 81) = 24.7, p < .001$) が得られた。

外見、職業、活動のどの次元でも女子の役割をとる男子のほうが男子の役割をとる女子よりも低く評価されており、特に男子の口紅に対しての評価が低かった。

学年の効果は傾向としてみられ、小学校2年生で反ステレオタイプに対する評価は下がる傾向があることが示された。

また、評価の分散は幼稚園児で最も大きく、2年生、4年生では分散は小さくなり評価が均一になることが見出され、反ステレオタイプへの評価は年齢により変化することが示唆された。

被験者の性の主効果と交互作用はみられなかった。

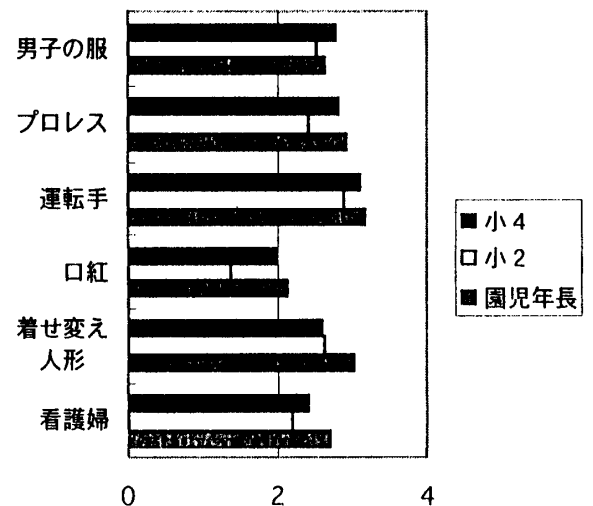


図1 反ステレオタイプ行動への評価